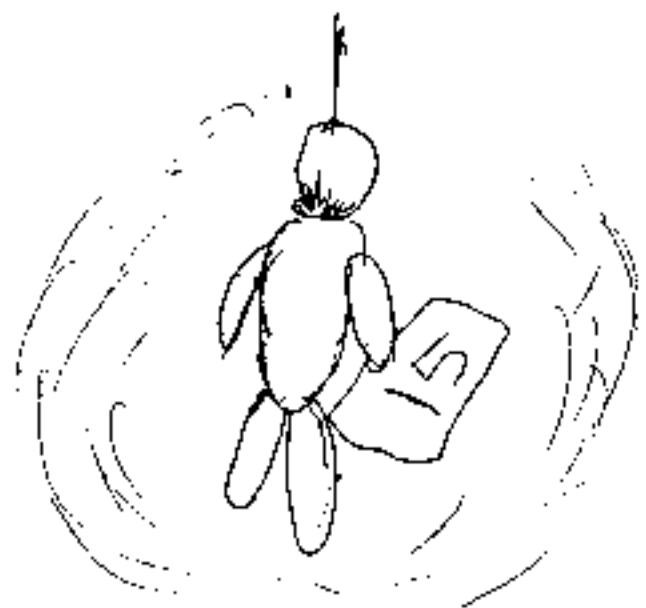


DEWECK & CARPENTHIA

首つり人形



(1)

「首つり人形」

この作品は、1970年3月ごろ考えたものを、下リジツナの先生に「おめいたものですか」とたずねられた。回答は「おめいたものは、新しく考え、所々改正させました。」

1970年9月30日書きおわり

伏見友彦

(3)

第一部

編 發生事件



彼はベッドからはね起きた。

歪にゆめを見たのだ。

彼は二三度顔をふってめまりをとった。

ふと左を見ると……

彼はとっぜんまっま月になった。

「ままヤが、あいつが生き……」

そこにはのっぺらぼうの人形が
首をつつてサレかけていた。

その体には「15」となだり書きが
してあった。

ぶるぶると彼はふるえて

きみが悪くなつてけりさうに電
話をした。

「ふんふん、はまー首をつた

人形、「15」という数字へえー

いたずらでしようままゆくり

あなたは休む事ですな、し

彼は身ふるいした。

「そ、そうだ。けいじだけいじ」

彼はそして電話張を引キ出した。

「ジャッケル……とジャッケル……」

そくやに電話の穴に指をつっこみ、

「ジャッケルさんですか、おねがいです、

急用が……え？……そこをなんとか

たのみます……困っているんで……

……たのみます お礼はいくらでも

し

こういうふうにはっきりときこふせて来て

もらったのは六日後であった。

彼は必ず悪いゆめを見

おきると必ず首つり人形がふら下がって

いる。それにその数は日まじに少なくなつて

いくのだ。『14』『13』『12』『11』『10』『9』……と

そしてついに数は『2』となった。

しかし手がかりはいっこうにつかめない。

ついに当日。

ジャッケルと彼は部屋にいた。

ジャッケルはゆっくり茶をのんだ。

するとガクッと体がたれてきてねこん

でしまった。

「だ、た、たいへん彼はおどろいて部屋を

とびだした。

彼はエレベーターの前に立ち止まった。

なかなかエレベーターはこない。

その時間はとても長く感じた。

「キーン」エレベーターはついた。
彼が一歩中へふみ入れた。

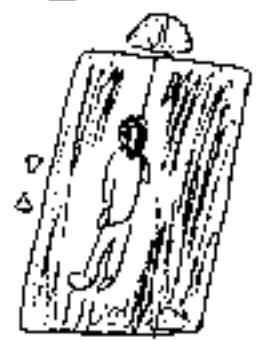
そこには空エ間の扉が広がっていた。

そして彼の首もとには首つりの形の
あざなわちが……

「以上が僕の調べた結果だ。」

「アムナカなみだわね。」

と、話しているのはカーペンティアとけいぶ
ベイリーであった。



(1)

「しかしこれが本当だろうか」とカーペンティア
「君はだれがこれをやったと思っただろうか？」
「これだけの事をやる人物ねえ」
「もちろん僕のライバルジヤークより他に
いるまいな」とカーペンティア
「アム」

此殺された男の見本(本文では彼とリーヤとしてあるが……)

「イライニ」 クッカー(三十五)

過まについては何もわかっていないが

とにかく大金持ち

と二で金を手に入れたのかは不明



事件はめいきゅう入りとなった。
一月ほどたつとたれも思ひだすものも
いなかた。

ところがあつる日のことだった。
あの首つり人形がまたもや
現われたのだった。

それは八月十三日の金曜日だった。
その男も^身アクビをしておきると
左のかべに首つり人形があるのだった。
彼はまっすおになつた。

それはゆっくり左右にゆれた。
その体には前と同じく15という数字が…
そして彼は電話の所へ歩み寄る。

事件があつたのだからけいさつはほうそあく
わけはなかつた。

「えッ……、たいへんだ。すぐけいさつ
をよこします。」

間もなくしてけいさつが来た。

それと同じジヤッセルけいさつ部であった。

げん重なげりらかりだ。たが実は……
数字は「10」となりやがて「3」にまで
なつた。

手がかりはせんぜんつかめなかつた。

彼は苦しうにもがきながら

「くそ、あいつがまさかそんな

とんでこない」といつてゐるのだ。

おまゝにいる時もゆううつそうにして

外出はせたいしなかつた。

彼はいずれやせこけてきた。

彼は「ううう……」とうなりとび起きた。

「は。ゆめか」といひおちついた表じよう

が見えた。

そして左をみるとあの首つり人形が……

その体には「命」の字目かきついたたたく

と書いてあった。

「うむ。」彼は気づいた。

「インケルがねむっているのだ。

カタカタカタ……

するとどこからともなく

「フッフッフッフ」

という声が聞こえて来た。

「だ、たすけてくれえい。」

むっくりとジャックルはおきよった。

いや、その顔は大怪盗ジャックルに変えていたのだ。

「い、生きていたのか……」

「フン、復しゅうをしなければおれは死なないよ。」

ところでおまえは あの

主ぼう者だったよ なあ、

だからおまえのために ジャス、いや

ジャックが特別の「死刑」を考えて来て

やったぜ、フッフッフ。」

彼の顔はすみをおびていた。

男は首をさめ おどおどしながら言った。

「な、なあ ジャスリッツ おまえは何が

ほしい？ な、昔の事はわすれて、

テラニーのいさんはおまえに……」

「ばか言うな おれの苦学は金ではかえないよ。」

命と引きかえた。おまえのね。」

「だって、そんざいにシヤスは、手まのぼした。」

「そして男の首をつかんで……」

「おかげでおれは何丈体でも出来る。」

「ようになつた。義足、義手のおかげでな。」

「と言う。」

「おまけに手は何メートルものばせるし。」

「そしてシヤスは、軽かると、男の体の首を」

「がみ五メートル上によげた。」

「首つりだ。」

「苦しい。ただすけてくれ。」

「そんなに苦しいから……よし、じゃあもうすぐ」

「楽にしてやるよ。なにしろ、それに、体中」

「電気を通すこともできるんだ。」

「ピリッッ」

と音がした。黒い体がおちて来た。

「おったッ」と、そこへトアがあき」

カーベニニヤアとシヤケルが入ってきた。

「おそか、たな、ざんねん、ちと足ちがい。」

「ともかくもシヤーク、おまえの身の上話を」

「聞かしてくれないか。」シヤークは、ああと」

うなずいた。

第二部

編 夢 悪 想 回



「どのころおれは悪のひとかけらまじらな
ような青年だった。
まじめに働らいたものだ。」

ある日、農場へ行くと中 老人が川に
おぼれていたんだ。

もちろん。おれはたすけた。
しかしついに死んじました。
「死ぬまえに老人は言った。

「古代のた……た……からが
地中に……あ……」とい、て洋皮紙を出した

んだよ。

その紙にはこう書かれてあった。

オ平・10¹²⁹/₁₅₂ 火の中へ 土の中へ
GOLDPLAZA-2-6-7

(20)

最初は僕もなんだかわからなかった。
しかしある日サッと解読できたのだ。

「オーストラリア平原10度の凹度場所 火の中」
ということであった。

僕はこここの計画を立て

秋とり入れがおわってから出発した。

糞書いであるとおりに火山があった。

ところがどこだかさっぱりわからな
いのでみると中か地中にうまったクイ
ミみたいなものにぶつかった。

(21)

引き出すところには

GOLDPLAZA ↓

と書いてあった。

僕はそのとおりしていった。

しかし喜ぶのは早すぎた。

となりの農場に「ミスナー」(「チー」)と
「マイス」(「マイスル」)つまりこの里にげだな
がいてすばやく聞きとった二人は僕の跡を
つらきまわりのだ。

歩いそくと山くずれのあとがあった。
そこをたつていくと急に僕は穴の中に
おちてしまった。

そこは広ら地下道だった。

たりまじきまきるめて火をつけた。



しばらく進んでいくと穴はニラのあめれ道と
なっていた。

たてふだかたさいた左には

OLLA →

右のたてふだには

GPPA → 左のたてふだには

DLNA → と書いてあった。

こゝがかんじんとして紙をたれ

GODOLANANINIGORI

と書いた。あかたはGODOLANANAN

番目も番目ついでに、四つ、六つ、OLAだ。

右のたてふだをすすんでいくとたんたん
なってきた。地下のじやう気が通る。こゝの
だろう。すすると「おふぶぶなうめたり風
かふ」って書いた。

そして「光が……」

その光の方向へいくとそこは外だった。

たまだったのだ。

思ったしたは山のうらがわにたしか
サー「じやう」って書いた。うらがわは
そのうらがわだ。

そこは金銀^{ニッケル}だった。まばゆいほどの金の
かけらがころころころころか。ていた。

目がくらむかとおもうくらいだった。

とっせううしろからドスツとおされた。よろめら
たまの下のおちとまうになつたが片手でへりま
つかんでいたのだらうじやうぶだった。しかし力
がつかなくてころころでかけ場をさがす。

するとよからい人の指の顔がみえた。

フィステラー マイスの二人だった。

そしておちの指を口でこらおらうくふみに

った。「ジヤークはしばらくことばを休めた。

それからまたとらった。

「気がついた時はおれは近くの小屋の中に

いた。動こうとしても動けなにかべしか

目ええなり。

「気がつかれたにかい」声がした。

「おれはこの小屋で実験をやらせてくらしらる

狩うどじやよ。心配はいらん。おまえは命は

助かた。しかし残念な事に手と足と体

はもう使えなくなつておる。と。おれは

狩人にたのんで特別なき手や足きき体をつけ

でもらった。その代わり世間からこのくらい身となつてしまった。

だれも半分ロボット下の出来事にならうとつぎ合図ものはいなかた。

しかし大がかりな改造のおかげで便利なることもあつた。手足は5mものばせるし電流も通せる。それに食料はいらぬ。おれの食料はついでに、おれの食料は電波だよ。空気中の電波を6千個のシリコンマスのロボットに2千倍に電気を引きのばして生かすのだ。だから食料ものはいらぬ。

さんおんお苦しんだ末、おれは復しやうを考ふるよになつた。

調べるとテスティーライスは赤名を使ってゆうゆうと大金物になつてくらしてゐるではないか。」「

シヤークがことをやめた。

「ギッセルがその先をつづけた。」「
「アリナナ事件の際、僕と部下を海の中に上げた。それを^{利用}したのだな。」

「シヤークがうなずいた。」

「しかし殺すつもりはなかつたよ……」

あの日は潮の流れがおきに向かつていた。

「あ、どうかな」

カーペンティアがいった。

「なるほど僕だったらえうしたのかもしれない。

だが時期が少しばかり……」

それに復習というのはもうなくなっている

はずなのよ」とらして「たぶん裁判長もみとめて

くれるだろうが。もしみとめてくれなければ

……」

「もしみとめてくれなければ……」

ピカッ ショークの目が光った。

ゆくりうでを上げると見えるまにそのうでが

火かき棒のようにま、赤となった。

「死線が走った。」

カーペンティアとショークが後たりした。

ショークはゆくり2人のと助に近づいて果木た。

2人のひたいから油あせがゆくりしたたり

おちてゆく。

(この続きは完結第三巻)

